シャンパーニュ、熟度が1週間で4.5%から8.3%に急上昇し、現代史上最も早い収穫を記録

業界団体は、乾燥した気象条件が果実の健全性を保った一方、収量は1ヘクタール当たり8,800kgの目標を大きく下回ったと述べた

2026年9月16日（水）



フランス北東部のシャンパーニュの生産者は、同地域の業界団体が前例のない収穫と評した2026年の収穫を終えた。熟度の急上昇、果実の健全性の高さ、そして計画を下回る収量を背景に、摘み取りは早くも8月第1週に始まった。

火曜日に公表された評価で、フランスではComité Champagneとして知られるシャンパーニュ委員会は、今回の収穫は時期、ブドウの状態、果汁に見られたバランスのいずれでも際立っていたと述べた。共同会長のダヴィッド・シャティヨン氏とマクシム・トゥバール氏、研究責任者のセバスティ

アン・デュビュイソン氏は、この地域で過去最も早い収穫だったと述べた。

熟度の進み方は7月末に一気に加速し、業界はその場で日程の見直しを迫られた。デュビュイソン氏によると、約600のぶどう区画で採取した測定では、7月27日時点の平均潜在アルコール度数は4.5%だったが、8月3日には8.3%まで上昇していた。この急上昇を受け、業界横断団体は正式な収穫開始を前倒しし、最初の摘み取りは8月12日に始まり、多くのぶどう畑では8月17日ごろに始まった。

さらに早い地域もあった。オーブ県のモングーでは、摘み取りは8月6日に始まった。デュビュイソン氏は、これほど早い収穫日を知るには1893年までさかのぼる必要があると述べた一方、当時は栽培手法もブドウ品種も異なっていたと指摘した。そのため、2026年は、この地域の現代史上最も早い収穫と見なせると同氏は述べた。

このシーズンの進行の速さは、栽培家、メゾン、技術チームを驚かせたが、シャンパーニュ当局は、現場で大きな混乱を招くことなく、部門全体が迅速に対応したと述べた。シャティヨン氏は、今回の変化は労働力や摘み取り日程から圧搾作業に至るまで、地域全体の物流を試すものだったが、生産者は対応できたと語った。

品質面では、初期の兆候は良好だ。委員会によると、収穫されたブドウの平均潜在アルコール度数は11.8%前後で、シャルドネは約12.3%だった。同時に、房と果粒は例年より小さかった。平均房重は約100グラムで、近年の約135グラムを下回った。乾燥した条件が病害圧を抑え、果実は委員会が驚くほど良好な衛生状態と表現した状態に保たれた。

デュビュイソン氏は、早期の果汁テイスティングで、フレッシュさ、果実味、テクスチャー、そして繊細さが示されたと述べた。シャンパーニュの製法が、そうした特性の維持に役立った可能性がある。この地域では依然として手摘みが行われており、房は圧搾機に届くまでそのままの状態で保たれる。その後、生産者は、バランスを損なわずに果汁を抽出するよう設計された、やさしく、精密で、区分けされた圧搾工程を用いる。

この組み合わせは、地域の最も評価の高いヴィンテージのいくつかとの比較を促しているが、シャンパーニュ当局はこの段階で断定的な評価を下すことは控えた。デュビュイソン氏は、熟度と酸のバランスが、前世紀の中でもごく少数の特筆すべき年、1921年、1947年、1959年を思わせると述べた。また、2026年を伝説的ヴィンテージと呼ぶのは時期尚早だが、果実の状態と果汁の品質は醸造家に確かな土台を与えるとも述べた。

この年の主な弱点は数量だった。平均収量は1ヘクタール当たり7,000kgとなり、業界が以前に設定した1ヘクタール当たり8,800kgを大きく下回った。例年同様、条件は地域内でばらつきがあり、不足分は村や区画ごとに一様ではなかった。

この影響の一部は、シャンパーニュのリザーブ制度によって和らげられる見通しだ。この地域で用いられているモデルでは、農業収穫が目標に届かない場合でも、過去の年の貯蔵ワインを取り崩して、市場に出せる量の確保に充てることができる。シャティヨン氏は、この仕組みによってシャンパーニュは長年にわたり、市場向け収量を農業上の収量から切り分け、必要なところの不足を埋めることができてきたと述べた。個別の事業者の中には依然として厳しい状況に直面するところもあるだろうが、マクロ経済的には2026年の不足が大きな問題になるとは考えていないと同氏は述べた。

それでもトゥバール氏は、この地域のモデルには圧力が強まっていると述べた。シャンパーニュは、天候の変動を吸収しながら、引き続き生産し、投資し、革新し、労働者に賃金を支払える、安定した運営のリズムに慣れてきたと同氏は述べた。そのリズムは維持が難しくなっており、業界は今後10年、15年、20年にわたってサプライチェーンをどう支えるかを見直す必要がある、と同氏は語った。また、栽培家にとって1ヘクタール当たり8,800kgは下限とみなすべきだと付け加えた。

収穫量の低さはブドウ畑の外でも重要だ。シャンパーニュのメゾンは、新規生産、リザーブ在庫、出荷計画の間で慎重なバランスを取ることに依存しているためだ。目標を大きく下回る収穫は、リザーブで一部吸収できるが、同様の傾向が続けば、高級スパークリングワイン事業全体で在庫の使用、販売数量、価格設定についてより精緻な判断を迫られる可能性がある。

当面の焦点はブドウ畑からセラーへ移っている。協同組合、独立栽培家、シャンパーニュのメゾンが、通常の暦より数週間早く到来した収穫のブドウについて、発酵と初期作業を始めている。